

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-110	A-141	13-096
滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門		
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Reduction of alcohol consumption and subsequent mortality in alcohol use disorders: systematic review and meta-analyses. アルコール使用障害における節酒と将来の死亡との関連：システマティック・レビューとメタアナリシス		
<b>執筆者</b>		
Roerecke M, Gual A, Rehm J.		
<b>掲載誌</b>		
J Clin Psychiatry. 2013 Dec;74(12):e1181-9. doi: 10.4088/JCP.13r08379.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
アルコール使用障害、節酒、全死亡リスク、メタアナリシス		24434106
<b>要 旨</b>		
<b>目的：</b>		
この研究の目的は、アルコール使用障害（以下 AUD）を有する人の節酒が死亡リスク減少につながるかどうかを調べることである。		
<b>方法：</b>		
MEDLINE、EMBASE、ISI Web of Science の 3 つの電子データベースから検索を行った。{アルコール依存あるいはアルコール乱用} かつ {死亡} かつ {コホートあるいは追跡} をキーワードに 2012 年 5 月までの英語文献を対象に検索を実施した。AUD を有する人の中で飲酒量の異なる各飲酒群により全死亡リスクを報告した 16 のコホート研究が同定した。各群における対象者数と死亡数、オッズ比(ORs)、人口統計学的、臨床的および方法論的変数データが抽出した。		
<b>結果：</b>		
“大量飲酒レベルよりは少ない”量までアルコール使用を減らすこと（禁酒を含む）は、継続して大量飲酒している群に比べて、死亡リスク減少と関連した。変量効果モデルを用いた ORs は 0.41 であった(95%信頼区間：0.34~0.50、P<0.001)。禁酒できた人のオッズ比 OR は 0.35 (95%信頼区間：0.20~0.60、P<0.001)、禁酒はできなかったが飲酒量を減らした人の OR は 0.61 (95%信頼区間：0.39~0.94、P=0.026) であった。飲酒量を減らした人に比べての禁酒した人の OR は 0.42 (95%信頼区間：0.19~0.92、P=0.031) であった。メタ回帰分析では、調査された研究の特性による有意な影響は示されなかった。		
<b>結論：</b>		
AUD における飲酒量の減少は、禁酒できた人だけでなく飲酒量を減らした人も、大量飲酒を続けている人と比べての死亡リスクの著しい低下と関連していた。禁酒できた人の死亡リスクは、禁酒まではいかないが飲酒量を減らした人のリスクよりも低く、最小であった。		